

## 倭寇戯曲作品あらすじ —明清古典戯曲版—

遊佐 徹

### はじめに

本稿は先年作成した「明清倭寇戯曲目録（初稿）」<sup>1</sup>（以下、「目録」と略称する）でリスト化した倭寇戯曲作品について、そのあらすじとそれに基づいて見出される倭寇戯曲の特徴をまとめたものである。あらすじについては、「目録」作成時に採用した配列順、すなわち作品を成立朝代、形式（雑劇、伝奇）および作品成立年代の3要素によって分類、配列した順（各作品にカタカナ五十音順の符合を割り振っている）に記載した。ただし、作品によってはテキストがすでに失われているもの、資料が乏しくてストーリーを十分にたどることができないものもある。その場合には「目録」に記載した《内容》（＝ごく簡単な作品内容の紹介）を再録した。本稿中に《あらすじ》と《内容》の2種類の部立てが存在するのはそのためである。

### I 明代雑劇

ア『三才真状元』（佚）：史槃

《成立》史槃の生卒——嘉靖十年（1531年）～崇禎年間（1628年～1644年）初め。

《内容》万暦年間、黄応甲の倭寇征討における活躍を描く。黄応甲は実在の広東の総兵官。

『明史』巻212でその実際は確認できる。

イ『剣侠除倭』（佚）

《内容》明・馮延年『南樓夢』（後掲）と同内容。

### II 明代伝奇

ウ『鳴鳳記』2巻41齣：王世貞？

《成立》王世貞周辺の人、もしくは唐儀鳳を作者に擬する説もある。成立年代は遅くとも万暦元年（1573年）を下ることはない。

《あらすじ》嘉靖年間のこと、土木の変の善後策を巡る対立は、夏言、嚴嵩ふたりの大学士の権力闘争に発展する。結局、言は様々な罪を着せられ死罪となりその妻妾も流されることになる。配流先では妾の蘇氏が出産し、寄寓先の鄒応龍が撫育する。やはり政争に破れ流謫の身となった楊継盛は言の妻と行き合い、その困窮を救う。やがて復権を果たした継盛は嚴父子を弾劾するがかなわず夫婦ともども節に殉じる。時に倭寇が沿海部

を襲い敵高は義子の趙文華を兵部尚書に抜擢し征討に赴かせるが、文華は戦うどころか居民の首を倭寇のそれと偽る。蘇氏を匿っていた鄒応龍と寄宿していた林潤は進士及第を果たすが、敵に疎まれ都から遠ざけられる。敵父子の専横は益々募り、敵対する者を尽く排除し続けるが、帰京した応龍が上疏弾劾するに及んで父子は失脚し、さらに潤の弾劾によって家産没収、世蕃は腰斬の処分を受ける。

エ『双雄記』（一名『善悪図』）2巻36齣：馮夢龍

《成立》万曆三十八年（1610年）以前に成立。

《あらすじ》呉県のひと、丹信は白馬廟の龍神より宝剣を与えられるが、そのお告げ通り幼馴染の劉双ともども、家産を巡る諍いによって叔父の三木員外の画策によって入獄させられる。さらには妻の魏氏も三木に命を狙われるが龍神によって命を救われる。時に倭寇が襲来し、ふたりは立功贖罪の機会を得、宝剣を手に参陣する。龍神は三木の悪行を玉帝に奏上し家産を奪う。千戸の地位を与えられた信と双はその諳んじる兵略をもって倭寇の巢窟をたたき征東將軍として凱旋する。宝剣を龍神に還し、衣錦還郷を果たしたふたりは家族との団円がかない、一方の乞食に身を落としていた三木は恥じて自死する。タイトルの双雄は丹信、劉双のふたりが武功を輝かせたことに因む。

オ『南楼夢』（佚）：馮延年

《内容》明代雜劇『劍俠除倭』に同じ。張子文が出洋流亡して王となる一節を含む。

カ『蓮囊記』（佚）：陳頭祖

《成立》陳頭祖生卒——天啓年間（1621年～1627年）に在世していた。

《あらすじ》万曆年間のこと。杭州のひと、徐嘉は真武帝の縁日で文娉と出会い恋仲になる。ふたりは詩を送り合い娉はそれを蓮囊に納め嘉に贈る。他日、嘉は宴席で居合わせた沈惟敬を嘲ったため、深い恨みを買う。一方、娉の父は嘉との仲を認めず偽りの婚約話をもって諦めさせようとする。伍員祠で神霊から自身が日本の関白を撃退する運命であると告げられさらに宝剣と剣術を授けられる夢を見た嘉は文家を訪れ娉の婚約を知らされる。時に平秀吉、号を関白が朝鮮を侵す。救援に赴いた明軍は敵せず和議を求め使者を送る。使者には日本語ができる惟敬が送られる。彼は嘉への恨みを晴らすため、娉の絵姿を関白に献じ、また兵部尚書に美女をもって関白の歓心を買う計略を進言する。その結果、娉は捕えられ朝鮮へ護送されることになるが、明軍の総帥として従軍していた嘉は護送途中の娉と再会を果たし、偽りの婚約の件を知る。軍令を偽ってまでも惟敬が娉を関白に献じようとしているのを知った嘉は急いで兵を進め、関白

を敗走させるとともに惟敬を捕える。嘉は靖海侯に叙せられ、娉との結婚も聖旨を得てかなうことになる。

キ『去思記』（佚）：沈応召

《内容》 莊一弘『古典戯曲存目彙考』（「目録」参照）は明・呂天成『曲品』の記述に拠って、倭寇より「王鉄面」と渾名された実在の姑熟県令、王鉄の抗倭と常熟県防衛戦を描くと記すが、王鉄は王鉄の取り違いと思われる。王鉄には『明史』巻290に伝がある。なお、鉄は嘉靖三十四年（1555年）に華蕩の戦いで陣没。

ク『飛丸記』2巻33齣：張景

《成立》 秋郊子の作とする資料もある。

《あらすじ》 袁州分宜のひと、易弘器は同郷の厳家とは代々の仇敵の間柄であった。時まさに厳嵩、世蕃父子が権勢を誇るただなか、会試に臨む弘器は挨拶のため世蕃を訪れることになったが、その屋敷に逗留中、娘の玉英と出会い恋仲となる。ふたりは詩詞を詠みそれを紙玉として贈り合う。世蕃は弘器を亡き者としようとするが、玉英が神のお告げを受けて弘器を逃がす。残された玉英は自尽を図ろうとするが世蕃の従妹の陸氏が身代わりとなる。それを知った世蕃は弘器捕縛の命を発する。かつて袁州を治めていた湯日新は弘器を弁護したため雲南に流されていたがその地を十万の倭寇が襲う。日新が撃退に成功したところへ厳父子の弾劾失脚が知らされる。武勝関を守る仇敵は世蕃を憎んでいたが、そこへ奴籍に落とされた玉英が送られてくる。仇敵の妾となることを拒んだ彼女は厨房付きの家奴となるが、ある日水汲みに出たところ弘器と再会する。会試に応じて合格し、御史となった弘器は仇敵を弾劾するとともに厳父子の家族の赦免を請う。願いは聞き届けられ、玉英は都に戻り弘器と結ばれる。

ケ『立命説（記）』2巻33齣（上巻佚）：万春園主人

《成立》 作者を蒙春園主とする資料もある。

《あらすじ》 ……袁黄は雲谷禅師を棲霞山に訪れ、昔日の罪を懺悔するとともに誓いを立てる。山神が菩薩の命を奉じ様々な誘惑をもって黄を試す。夫婦ともどもその信念と心根を嘉された黄は一子を授かり、進士にも及第し、任地の宝坻県で善政を敷く。時に日本国王は薩摩州のひと、平秀吉を関白に任じ、朝鮮に攻め入らせる。大関王と称した秀吉が左將軍行長、右將軍清正を従え攻撃すると朝鮮國王李暉は窮地に追い込まれる。万曆帝は宋應昌を救援に向わせ宋は黄を参謀に据える。主戦派に対し一時は倭寇の招撫を画策するものも現われるが失敗する。結局は李如松等の活躍によって秀吉を破り、

平壤を二年に渡って占拠し続けたその勢力を朝鮮から駆逐することに成功する。黄は通政司参政に昇進し、一子、儼も及第任官を果たして應昌の娘を娶る。その儼に黄は「立命説」書き与える。

コ『完扇記』（佚）：寄鳴道人

《内 容》妓女、秦小鳳と懇ろな間柄となった賀は、劉亮と敵対することになる。のちその劉は倭寇に従ったために捕えられ、結局小鳳は賀に帰すことになる。

サ『大刀記』（佚）：夏□□

《内 容》劉綖等の明軍将領の援朝抗倭の戦いを描く。物語は綖の子、佶の勝利を描いて終結する。

シ『感虎記』（佚）：作者不詳

《内 容》孫山の孝心が虎さえも感動せしめたという物語。途中で倭寇征伐の一節が差し挟まれる。

ス『鉄弓縁』（佚）：作者不詳

《あらすじ》揚州のひと、匡鎮の娘の瑞香と家僕の匡忠そして盗賊の皇甫剛、酒売り媼の蕭氏と娘の元彩霞がたどった波乱の人生を描く。匡鎮の赴任の際瑞香を守り従っていた匡忠は、冀州総兵の飛龍の子、啓新を盗賊の皇甫剛から救い出す。新は瑞香を見初め求婚するが鎮の反対に遭う。一方、酒売り媼、蕭氏の娘元彩霞は亡父が遺した強弓、鉄貽弓の縁で忠と婚約するに至るが、その彩霞にも新は横恋慕する。失恋の恨みを募らせた新は父と謀り鎮、忠を陥れようとする。折から関白が兵を構え侵入してきたのでそれと結び兩人を苦しめるが、改心した剛が救いに現われる。しかし、龍は執拗にふたりを狙い罪に問うことに成功する。新はその機を捉え、瑞香を我が物としようとするが、瑞香は彩霞と謀り新を殺し遁走する。両女子は追及を恐れ彩霞が男装して皇甫剛の名を名乗り夫婦と偽る。逃避行の最中、関白軍に遭遇した彩霞はやむなくその軍に加わる。他方、本物の皇甫剛は熊祥の幕府の補佐官となり鎮の汚名を雪がんとする。祥の見識によって鎮の冤罪は晴れ、龍は倭寇との戦いのなかで剛によって謀殺される。その頃、蕭氏は娘を訪ねる旅の途次、倭寇に捉えられ、そのなかの一将が娘であることを知る。その倭寇に挑んでくる剛と忠に対して彩霞はかの鉄貽弓を証拠に内応を約し、関白を斬る。諸人みな封爵に与り鎮は娘を剛に娶せる。

### Ⅲ 清代伝奇

セ『秋虎丘』2巻30齣：王鐘

《成 立》王鐘の生卒——万曆三十五年（1607年）～康熙十年（1671年）。

本作品には康熙十五年（1676年）刻本あり。

《あらすじ》襄陽のひと、汪璞は、ある日虎丘に遊んだ際、桂姐を見初め婚約するが、侵入した倭寇に桂姐を連れ去られてしまう。璞は総兵の斉世昌に妓女、王翹児を利用して頭目のひとりの徐海への調略を献策する。その任を請け負った翹児は徐海の説得に成功するとともに拉致されていた桂姐を見付け出し脱出させるが、桂姐は世昌の妾とされてしまう。嫉妬深い斉夫人によって桂姐は亡き者にされそうになるが観音菩薩の計らいで救出される。一方、翹児は斉総兵と呼応して内外から倭寇を攻め徐海を滅ぼすが自身も入水して海に殉じる。桂姐と再会しかねての約束を果たし得た璞は翹児の働きに感謝して、秋たけなわのある日、虎丘において追善供養を挙行了した。

ソ『芙蓉楼』2巻29齣：双溪薦山（徐沁、一説に汪光被の号）

《成 立》徐沁の生卒——天啓七年（1627年）～康熙二十二年（1683年）。

汪光被は康熙年間の歳貢生。

《あらすじ》元の趙皇太后は政務に勤しむ傍ら詩賦に親しみ、芙蓉楼の宴で詠んだ詩に和する女子を求めたところ杜弱蘭、李蒨華のふたりを得る。皇太后はふたりに女学士の称号を与えるとともに将来を嘱望される孟衍、姚若采との婚姻も賜る。しかし、4人の男女はそれを享けられない事情を抱え、さらには御史の息子の恨みも加わって、ついには皇太后の裁可を仰ぐ事態となる。芙蓉楼において孟、姚の実力を杜、李が測ることとなったが、杜が出した問題のひとつは「擬倭寇蕩平聖駕親御武成殿獻捷群臣賀表」であった。結果は甲乙付け難く両者ともに状元の榮譽を賜り、前旨のごとく4人は結婚の運びとなる。加えて杜の父、兆祥が倭寇を討ち果たしたことで、武功と文治の慶事が重なることとなる。

タ『琥珀匙』2巻28齣：葉稚斐

《成 立》葉稚斐の生卒——万曆四十年（1612年）～康熙三十五年（1695年）、天啓三年（1623年）以前～康熙四十六年（1707年）以前、順治元年（1644年）？～雍正三年（1725年）？等諸説あり。

《あらすじ》姑蘇のひと、胥墳は西湖に遊んだ折、寄寓先の隣家の娘、仏奴と恋仲となる。ところがその父の桃南洲に盗賊の金髯翁の一味であるとの嫌疑がかけられてしまう。仏奴は父の罪を購うため揚州の御史、東東の妾として身を売るものの、御史は実は偽者で彼

女に妓女となるよう迫る。一方、頃は科挙の合格発表を待つ間に仏奴に会うため南行するが、彼女が身を売った際に残した血書に従い妹との結婚を勧められる。その後、本物の東御史が偶然仏奴の境遇を知り、偽者を捕えるとともに、彼女を手元に引き取るが、夫人が嫉妬に駆られ仏奴を手にかけてしようとする。その危機を救ったのが金髯翁で、彼女は両親の元へ帰り着くことを得る。その経緯を東東が朝廷に報告すると、胥は翰林院編修を授けられ、仏奴との婚姻もかなうことになる。

チ『錦蒲団』（一名『金不換』）2巻25齣：朱素臣？

《成立》朱素臣生卒——天啓年間（1621年～1627年）～康熙四十年（1701年）以後。

《あらすじ》裕福な紳士の姚彪は一子、英に同郷の上官氏の娘を添わせるが、賈親甫、趙能武といった無頼との付き合いを好む英の品行は改まることを知らない。上官氏の方では、娘を実家に引き取り、英の自由に任せていたが、彪の死後、姚家の家産が売りに出されるたびにそれを買い取り陰で英を支え続ける。英は、能武が自分の名を騙らって総督、胡宗憲の幕下に潜り込みながらも侵入した倭婦、胡孫との戦いを目前に逃亡したため、獄に繋がれる憂き目を見るが、この時も義父によって救われる。しかし落ちぶれた英をかつての仲間は相手にしない。義父の方も敢えて彼に試練を課すうち、英は錦蒲団のうで翻然と悟り、前非を悔いるようになる。その後英が倭寇討滅戦で手柄を挙げ、故郷に錦を飾ると、義父はこれまでの援助について打ち明け、家屋、財産、娘を英に還して、一家の団円を祝うこととなった。

ツ『蟾宮操』2巻32齣：程鏞

《成立》程鏞は康熙間の進士。

本作品は康熙三十九年（1700年）成立。

《あらすじ》元のフビライ帝の御世、寄る辺なき身にして歌童、桂輪と連れ立つ荀鶴がたまたま賦した「蟾宮操」によって御史、宓鰲に気に入られたことを発端とする物語。宓は国政を壟断する丞相、桑哥と対立して嶺南に流され、鶴に添わせることを約した娘、瑶華とも別れ別れとなる。瑶華の身代わりとなり入内した桂輪は、皇后の命により海外に仙薬を求めるが、日本の女王に勾留されてしまう。一方、鶴は会試に臨み、桑哥の手ものものの妨害を退けついに状元での及第を果たす。時に日本の女王が侵犯し、桑は鶴を征倭大將軍参謀の地位に就け出陣させる。擒になった鶴は桂と再会を果たす。その頃国内では桑が斬られ、その首が戒めとして倭人に示されると戦いは止み、鶴、宓等の帰還がかなうとともに鶴と瑶華の結婚の約束も履行されたのだった。

テ『紅蓮案』（佚）：呉龐

《成 立》呉龐は康熙三十一年（1692年）前後に在世。

《内 容》明・徐渭の戯曲集『四声猿』のなかの「玉禅師翠郷一夢」（水月寺の僧、玉通の態度に怒った臨安の尹、柳宣教は妓女の呉紅蓮を用いて玉通に色戒を破らせ死に追い遣る。玉通は柳の妻に投胎して柳翠郷として生れ落ち復讐を計るも妓女に身を落とす。結局、翠郷は月明和尚の導きで大悟し、出家する）を踏まえ、徐渭を物語の主人公に据えて渭に紅蓮を殺させる形で玉通の無念を晴らす仕立てとした物語である。物語の前段では、陰謀によって服役を余儀なくされた渭が、浙閩総督に任じられた胡宗憲の幕僚となり胡の倭寇征討に様々な形で関わりを持つようになることが語られる。

ト『双翠円』（又名『双翹円』、『翠翹記』）2巻38齣：夏秉衡

《成 立》夏秉衡の生卒——雍正四年（1726年）～卒年不明。

本作品は乾隆三十二年（1767年）成立。

《あらすじ》ストーリーは青心才人『金雲翹伝』にほとんど同じである。

清明節に郊外へ足を伸ばした金重は、墓参する王家一行に行き逢い、娘の翠翹を見初める。やがて再会したふたりは将来を誓い合う仲となるが、折悪しく重は叔父が客死したため翠翹を残し遼陽へ旅立つ。一方王家には翠翹の父に盗みの嫌疑がかけられるという難儀が襲いかかる。翠翹は父を救うために身を売る決意をし、母に妹の翠雲を自分の代わりに重に娶せるよう頼み家をあとにする。翠翹は妓楼に売られ客を取らされそうになるが、その危難を束守が救う。翠翹は守の妾となるものの今度は守の妻の虐待を受ける。束家を追われるように逃げ出した翠翹は、拳兵し破竹の勢いで進撃する徐海に出くわし、その妻となる。海はこれまで翠翹を苦しめてきたもの達を捕え集め恨みを晴らせる。総制の胡宗憲が知人を介して海の招撫を試みると、翠翹も海を説得する。しかしその言を容れて投降した海を宗憲は斬殺し、さらに翠翹をも我が物にしようとする。宗憲を痛罵しその邪な心持を詰った翠翹は宗憲の官府に送られる途中入水自殺を図るが、進士に及第し王家の人々と任地へ向う途中の重に救われる。翠翹は打ち続く苦難の末に家族と再会を果たし、翠雲とともに重に輿入れする。

ナ『万花楼』（佚）：朱佐朝

《成 立》朱佐朝は清初著名劇作家。

《あらすじ》開封の諸生、衛茁は才能豊かにして御史、曾銃の娘と婚約していた。時に巖嵩が建てていた万花楼が成り、その慶賀のために衆官が赴くが、巖を快く思わぬ夏言はそれを拒む。万花楼を詠じる詩を作ることを拒んだ衛茁も巖におもねる曹必頭によって

陥れられ生命の危機にさらされる。曹は万花楼を飾る宝物を探すために海人の王直に通じ、さらに海寇の魏南金、徐明山等とともに群倭と結び、沿海、辺地を略奪して回る。銃は計略を用いて南金を捕えるが、嵩は茁と銃の関係を知って南金を許し、茁を亡き者にしようとする。危うく難を逃れた茁は親友の鄭時薦によって匿われる。南金を再び捕えんとした銃は嵩の指示を受けた東廠によって殺され、その娘と茁の母も邠陽関で囚われの身となる。さらには言も嵩によって致仕を強いられたうえ殺される。一方、時薦と茁は会試に臨むための上京の途次、必頭に出くわしその罪を問うことに成功する。ふたりは及第を果たし、茁は官を擲って母親を捜し見付け出す。あたかも嵩が弾劾され、時薦の上疏によって茁は復職がかなうとともに帝のお褒めに与る。

ニ『玉璫縁』（佚）：作者不詳

《成立》清初人の作。

《あらすじ》馮夢龍『警世通言』巻18の「老門生三世報恩」の鮮于同の故事に基づく（さらには、同書巻17の「鈍秀才一朝交泰」の故事も一部援用している）。

鮮于同は齢三十にして孔静貞を娶るが、登科を果たすまでは華燭の典を挙げぬことを誓う。会試に臨む同に孔氏は先祖伝来の玉璫を贈る。県令の蒞誠は平素より年少なる者を重んじていたため、第一位の成績で及第した同を執拗に斥け続けるが、やがて牟奎の誣告によって罪に問われた際に刑部主事となっていた同に救われる。時に倭寇が浙江を襲い同は監軍兼御史に任じられ対応を任される。過去の経緯があるため同を恐れる奎は娘の文綃を男装させ門役として仕えさせるが、同はひそかに匿い、その間に一子を儲ける。のちに四川巡撫に昇進した同は楊応龍を討って功績を挙げる。同に縁のあるもの達はみな任官を果たし、同の子も状元で合格するとともに、誠の子、孫も旧恩を顧みる同によって栄達の道を約束される。

又『桂香雲影』1巻33齣：秋緑詞人（顧椿年？）

《成立》現存する道光刊本に乾隆五十一年（1786年）鷗夢詞人序文あり。

《あらすじ》浙江山陰のひと、汪夢桂は受験のため上京する途次、西湖で花神廟に祈りを奉げる劉桂雲に出会い、誓いの品を贈り合って将来を約束する。都での受験を終えた頃、倭寇が南京を犯し、帰郷に支障が出た夢桂は、朝廷に対し平倭の策を献じる。元帥に任じられた夢桂は勇躍奮戦、倭寇を一網打尽にしてその頭目を帰順せしめる。凱旋後、夢桂は桂雲を捜すが行方は杳として知れない。やむなく桂香雲影と題する彼女の似姿を描き枕元に掛けていたところ、花神の知るところとなりふたりはその導きで夢のなか



での再会を果たす。

ネ『双龍珠』1巻10齣：椿軒居士

《成 立》椿軒居士の生卒——乾隆三十四年（1769年）～道光二十七年（1847年）以降。一説に乾隆三十四年（1769年）～咸豊八年（1857年）。

作品は道光十九年（1839年）成立。

《あらすじ》明の永楽年間のこと。大旱魃を惹き起こした罪を責められ火山小龍は天帝によって魚に変えられ人間に捕えられる。仏心篤き銭昭徳の妻、鄭氏によって救われた小龍は避水珠を献じてその恩に報いる。一方、大雨の災禍を咎められ蚌蛤に変化させられた南海竜王の娘もやはり鄭氏によって救われ、御火珠をもって感謝の印とする。時に倭兵が侵入し略奪をほしいままにする。官兵の抗しあぐねる様を目の当たりにして、銭昭徳父子はかの避水珠と御火珠を擁して助戦に赴く。この宝物を前に倭寇は壊滅し、凱旋した銭父子には朝廷からそれぞれ定海將軍と巡海副將の職が授けられた。

ノ『返魂香』4巻40齣：宣鼎

《成 立》宣鼎生卒——道光十二年（1832年）～光緒六年（1880年）。

香雪道人の同治九年（1870年）十月二十日序あり。

《あらすじ》水害で家族を失い、修行の道に入った王鑑を中心に、萊州知府の呉用修とその一子、柱臣、そして徐州のひと、謝漁とその妻の珮娘がたどった数奇な運命を描く。用修は倭探を捉えながらも倭寇と通じた盗賊に奪還を許したため罪に問われる。その一方で、逃がれた倭探の扎破玉は珮娘をさらう。身投げを図った珮娘は通りかかった鑑の恩人である王学礼に救われ、柱臣は都司の沃田の援助で父を救うべく上京するが、その途次に鑑にも救われることになる。学礼に救われた珮娘は鑑の計らいで田のもとに身を寄せていた夫に再会を果たし、他方用修も罪を許され一家はめでたく団円をかなえた。だが、鑑と関わりをもった人々に幸福が訪れていた時、彼自身はすでにならず者の手にかかり儂なくなっていたのだった。その仇を討ったのは田であったが、彼もまた折から天長を襲った倭寇の討伐に赴き陣没することになる。それから二十年後、この世に生を受けた鑑はやがて学礼のもとを訪れ、自身の前世を語る証拠を示し、彼が生前手ずから植えた墓前の梅もよみがえり、馥郁たる香りを漂わせる。タイトルの『返魂香』の名はそれに因む。

ハ『双奇会』18齣のみ抄存：湖上逸人

《成 立》湖上逸人については姓名、生卒ともに不詳。

《あらすじ》倭寇小説の一篇として数え上げられる「楊八老越国奇逢」（『醒世恒言』巻18）に基づく作品。

……貧士の楊遺は花木瓜の薦めで刁家に住み込み家庭教師の口を得るが、かえって木瓜と刁鑿児によって妻、李氏が狙われるという憂き目に遇う。友人の干霄が鑿児を殺し夫妻を救うが、楊家は難を避けるために離散することになる。福建に逃げた遺は、偶然に鑿児の許婚であった蘂氏を娶るが、当地を襲った倭寇によって日本に拉致される。その十九年後、倭寇の進入に付き従うことになった遺は、脱出に成功するものの、今度は間諜の嫌疑によって官兵に捕えられる。しかし、官衙で対面した紹興の郡事とその補佐官は離れ離れになってしまったふたりの我が子であった。かくして遺は両妻、両子との団円を果たす。

#### IV 朝代不明伝奇

ヒ『全家慶』（佚）：作者不詳

《あらすじ》若くして寄る辺無き身となった富錦章が二十歳を迎えたある日卜占を良くするという廬山の紫雲道人を訪ねる旅に出たことを発端に展開する立身出世物語。廬山へ向う途次、錦章が施した陰徳は上帝の嘉するところなり、また、行き会った口のきけぬ娘、青娥や実は異形の徒である青松、驪龍の苦悩も自身の将来ともどもに道人の占断により解決、快方に向うこととなったのに加え、青娥が錦章の妻となるという慶事が打ち続く。時に土木の変が勃発し、倭寇の侵入が報じられる頃、神霊の助けで状元及第を果たした錦章は兵部尚書に抜擢され、兵五万をもって倭寇討伐に赴く。一方、一子昌宗も状元で及第し、景泰帝のおぼえめでたく十万の兵を授けられる。父子心をひとつにして倭寇に挑むとかの驪龍の助力もあって大勝利を収める。凱旋したふたりには様々な恩典と慶賀の品が与えられる。

フ『両香丸』（佚）：作者不詳

《あらすじ》嘉興の諸生、顔潔と白蓉仙、そして潔の友人にして蓉仙の兄である白眉と王翠翹の波乱に満ちた経歴が物語られる。千年前に入寂した法剣和尚の侍者が俗世に転生した蓉仙と翠翹は幾多の苦難を嘗めることになる——生家を火災が襲うなか誘拐された蓉仙はあやうく娼妓として売られそうになり、眉に嫁いだ翠翹は徐海にさらわれ妻となることを強要されるが投身する。かろうじて一命を取り留めた翠翹を今度は倭寇の招撫を図っていた総督胡宗憲が我が物にしようとするが、この危機もどうにか逃れる。一方、徐海は倭寇と手を結び、かつて翠翹を手に入れようとしたことのある徐海の甥が蓉仙そして翠翹を狙うも九天元（玄）女が救う。その頃都では潔と眉が進士に及第し

倭寇討伐の命を受けていた。倭寇の長刀に苦戦し、蘇州城に籠城するふたりを九天元（玄）女に飛劍の術を授けられた両女子が見事救い、徐海は自沈して果てる。めでたく潔と蓉仙は夫婦となり、眉も翠翹の健在を知る。そこへ法劍和尚が現われ両女子の前世を説き、また潔と眉の具奏によって九天元（玄）女は廟祀の対象となる。

へ『泮宮縁』（一名『鴛鴦鬧』（佚）：作者不詳

《あらすじ》呉中雲水のひと、巫高は童試において県令の全士誠により首席に抜擢される。高は隣の山家の娘、衣雲を見初め将来を誓い合う仲となるが、衣雲の叔父、豈仁が山家の家産を狙うとともに衣雲までも手に入れようと企みを巡らす。豈仁はついに衣雲の誘拐にまで及ぶが、運よく士誠が彼女を救い豈仁を捕える。一方、高は会試に臨んで探花で合格し、浙江巡按御史を授けられるが、それに先立ち高は異僧、断厓に出会いこののちの吉凶運命を告げられていた。士誠に代わって巡按御史として浙江に赴任した高を倭王、木利蘭が妖術を操り襲う。一旦は敗れ籠城を余儀なくされた高のもとに断厓が現われ、神通力をもって倭王を破る。凱旋した高は平章軍国事の位を賜り、衣雲を娶り、その妹、芸枝を第二夫人とする。

ホ『珊瑚釧』（佚）：作者不詳

《成立》明の伝奇『西湖記』と同内容。劇中のエピソードが順治五年（1727年）に進士となった人物の故事に似る。

《あらすじ》本作は秦淮墨客校の署名を持つ『西湖記』（明・万暦年間金陵唐振吾刊本〔いま、『古本戯曲叢書刊二集』所収〕）の改作である。以下、『西湖記』のあらすじを記す。

巫山のひと、秦一木は郷試に合格したものの後嗣のないことを気に病み、妻を離縁すると杭州に遊学する。ある春の一日、西湖に遊んだ一木は、段百万の娘、如圭と出会う。如圭は一木を気に入る一方、一木は如圭が失くした珊瑚釧を拾う。その後一木は、釧の返還を口実にするなど様々な策を駆使して段家に近付き、互いの気持ちを確認することができたが、会試のため都に上ることとなり、改めて釧を誓いの品として受け取る。その一木のあとを如圭の兄、奇聞が追ひ、途中で倭寇に捉えられるが胡宗憲が計略をもって倭寇に毒酒を盛り事無きを得る。その後、一木は探花で合格を果たし、如圭を我が物にしようとする富豪、成尚の妨害も退け、宿願を達成する。

マ『喜逢春』（佚）：作者不詳

《あらすじ》寧波定海のひと、阮畸は才学に恵まれていたもののその性格と暮らし向きによって周

りからは軽んじられていた。定海へは方自正が教授として赴任してきたが、自正は八歳の時にならず者にさらわれ長じて売られようとしていた甥の皓の娘、花鈴を救い、学吏の盛自誠に預け世話をさせる。ある日、崎は居酒屋でのもめ事で訴えられるが、自正は却ってその才能を認め、彼を後楼に住まわせる。そこで崎は花鈴と出会い妻に迎えたいと望むようになる。時に定海を倭寇が襲い、崎は花鈴の金鈴を手に、花鈴は崎の文章を錦囊に蓄え離れ離れとなる。自誠にはぐれ倭寇に襲われそうになった花鈴は皓に救われるが、親子であることを知ることのないまま皓は倭刀ふた振りと花鈴の錦囊を所持していたため官憲に捕えられる。一方、難を逃れた花鈴は漁民の助けで実家に帰り着く。その頃崎は呂稽と名を換え登第を果たし、平倭策を献じたことで江南巡撫に抜擢される。帰郷した自正は皓の妻に行き合い、花鈴との再会を果たす。呂稽こと崎は任地で倭寇に通じた者の取り調べに当たっていたところ、皓が冤罪と訴え出たため、通倭の証拠とされる倭経を実見するとそれがみずからが花鈴に贈ったものであることに気付く。冤罪の晴れた皓を参軍として加えた崎は倭寇の上陸を誘いこれを撃破して都に凱旋する。自正が崎を訪れるとそこに皓がおり、皓は自分が救った女性が実の娘であったことを知る。そこで崎は自正を通じて皓に花鈴との結婚の許しを請う。

ミ『澄海楼』（佚）：毛維坤（一説に毛鐘坤）

《あらすじ》山東歴城のひと、高仲誉は帰省の際たまたま登った澄海楼で遼陽の秀士、済登科に出会い意気投合、登科は妹を仲誉に嫁がせると約す。その時、道士を装った呂洞賓がふたりの運命を予言し、登科は道士とともに医巫閭山を訪れることにするが、途中で出会った丁令威から道士が呂洞賓であり、明の命運が尽きようとしていることを告げられる。肉親に別れを告げた登科は、淮泗の間を雲遊し、破廟の修理に勤しんでいたが、住まいを奪われた老狐の恨みを買う。登科は老狐の娘婿の独角大王に苦しめられるが、呂に救われる。その後、呂の命で北遊した登科は無実の罪を着せられ都に護送される最中の侠客、承光を術によって救う。時に倭寇が江浙を騒がし、戚継光が征討の任に当たっていたが、登科は承光を推薦する。その頃、仲誉はすでに進士に及第し、かつての約束を果たすために遼陽を訪れる。一方登科は承光の任地を訪れていたが、かの老狐の娘婿夫婦の悪行を知り、調伏のため呂の来臨を仰ぐものの、結局彼等の許しを請う。登科の修行が成ったと見た呂は、彼に帝への目通りを勧める。登科は嚴世蕃の怒りを買うが帝からは真仙のお墨付きを得る。遼陽に赴き仲誉に再会した登科は彼に暇乞いをするとともに澄海楼での呂との出会いを思い出しながら夫婦そろって白日昇仙する。

## 小結

以下、上掲の作業によって現在までのところ得られた倭寇戯曲の特徴について列挙し、今後の本格的な研究の出発点としたい。

- 1、倭寇小説の研究では、明清白話小説作品のなかに総計9部の作品を見出したが、今回の倭寇戯曲研究に関する調査では、佚著も含め32部という作品を数え上げることができた。しかもこの数は、明清古典戯曲作品に対する調査の結果であり、今後調査対象を地方戯曲作品にまで広げればより多くの倭寇戯曲作品が見付かることを予想させるものである。
- 2、もちろんこの32部の作品における倭寇の描かれ方、ドラマにおける役割には濃淡がある。多くの作品は倭寇をメインテーマとしてドラマを展開している訳ではない。しかしその場合でも倭寇は単に時代背景や点景として描かれているのではなく、登場人物達の離合集散、毀誉褒貶に深い関わりを持つ存在として登場する。
- 3、倭寇小説の研究の際にも確認できたことであるが、戯曲作品においても倭寇は具体的な人物、戦役と結びついて描かれることが多い。これは倭寇戯曲を「時事劇」と見なす研究<sup>2</sup>を補強するものといえる。
- 4、3については、特に倭寇が「(平)秀吉」や「関白」と結びついて描かれたケースがいくつも見出された点を指摘しておきたい。私はかつて中国の通俗文学作品において秀吉が登場する作品に言及した際、かつて青木正児博士が指摘した3作品にかの『三言』中の名編「杜十娘怒沈百宝箱」を加えてそのほぼすべてであろうと結論付けたことがあった<sup>3</sup>が、その見解は修正されなければならない。

## 注

- 1、『中国文史論叢』第15号(2019年)。
- 2、李江傑『明清時事劇研究』(齊魯書社、2014年、済南)。
- 3、拙稿「小説に描かれた倭寇——明清「倭寇小説」概論」(須田牧子編『「倭寇図巻」「抗倭図巻」をよむ』[勉誠出版、2016年、東京]所収)。

[付記] 本稿は、2019年度科学研究費助成金・基盤研究(C)・研究課題「倭寇小説、倭寇戯曲の研究」(課題番号18K00354)の研究成果の一部である。

